

内房沿岸域における藻場消失状況及び原因の推定

千葉県水産総合研究センター 生産技術研究室

■ 要約

内房沿岸域の藻場消失現象が見られる地域において、その状況を把握し原因を推定した。岩井地先ではこれまでに約40%の藻場が消失し、原因は主にウニ（ガンガゼ類）による食害であると推定された。富浦地先では約95%の藻場が消失し、ウニよりもブダイ等の植食性魚類による食害の影響が大きいと考えられた。

物理的環境では、両地先とも夏季にアラメ・カジメの分布水温の上限である27℃を超える年が認められ、高水温が悪影響を及ぼした可能性が考えられた。

隣接した海域でも消失状況と原因となる食害生物に違いが見られたことから、さらに広範な現況把握と地先ごとの消失原因の推定を行い、有効な対策を進めていく必要がある。

研究課題：2017-01 藻場消失にかかる実態調査と原因の推定

■ 背景・ねらい

近年、館山湾から保田沖までの内房沿岸域における継続した藻場の消失現象が漁業関係者から報告されるようになっており、物理的要因（台風、時化等）による一時的な消失とは異なる、季節的消長の範囲を超えた消失が継続する「磯焼け」がみられるようになった（図1）。

藻場の継続的な消失は、本県の漁業生産において重要な位置を占めている磯根漁業に対し大きな影響を与える恐れがある。そこで、内房沿岸域の藻場消失現象が見られる地域において、状況を把握し原因の推定を行った。



図1 藻場が消失した岩礁

■ 成果の内容

- 1 藻場の分布調査により、南房総市岩井地先で約40%、富浦地先では約95%の藻場が消失したと推定された。
- 2 植食性生物の分布調査及びアラメ類の食害実験の結果から、岩井地先の藻場消失原因は高密度で生息しているウニ（ガンガゼ類）による食害と推定され（図2）、富浦地先ではウニよりもブダイ等の植食性魚類による食害の影響が大きいと考えられた（図3）。
- 3 藻場消失域で水温を連続測定したところ、岩井地先では2017年8月に5日連続で日平均がアラメ・カジメの分布水温の上限である27℃を超えた。富浦地先では2012年8月に日平均が27℃以上となった日が20日に及んでおり（図4）、夏季の高水温が海藻の生育を妨げている可能性も考えられた。
- 4 岩井と富浦のような隣接した海域においても、消失状況と原因となる食害生物に地域差が見られた。有効な対策を実行していくには、今後も広範な現況把握と地先ごとの消失原因の推定が必要である。



図2 ガンガゼ類の高密度分布（岩井）

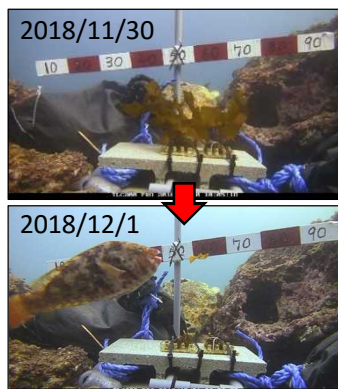


図3 海域でのアラメ食害実験（富浦：ブダイによる被食）

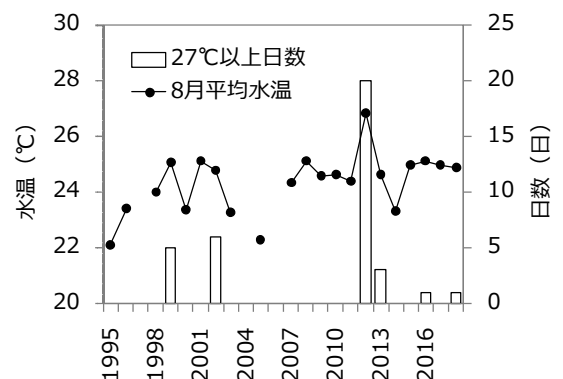


図4 1995-2018年の富浦湾10m深における8月平均水温と日平均水温27℃以上の日数